月刊

こころのとも

第十三巻
十一月号

国民こぞって嘘つき

西友が
偽装肉を売った
謝罪として
購入代金の
払い戻しを計画したところ
販売額の何倍もの
申し込みがあり
その通り支払ったという
中には十万円の
人もいたらしい

何とさもしいことか！

政官財の人たち
だけではない
日本人は
国民こぞって嘘つきに
なったようだ

総合学習か基礎学力か

文科省
総合学習
勧めるのか
基礎学力を
養うのか
教育現場は
混乱しているぞ

人生を考え直して
みたい人は（一〇六）

―空海『即身成仏義』解説（九）―

〔（四）―1　六大総説〕続き

また『金剛頂経』に云わく、「諸法は本より不生（ふしょう）なり。自性、言説（ごんせつ）を離れたり。清浄にして垢染（くぜん）無し、因業（いんごう）なり、虚空に等し。」

此れまた、『大日経』に同じ。諸法とは、謂（いわ）く諸（もろもろ）の心法なり。心王（しんのう）・心数（しんじゅ）その数無量なり、故に諸と曰う。心識（しんしき）、名異にして義通ぜり。故に天親（てんじん）等は、三界唯心を以て唯識の義を成立（じょうりゅう）す。自余（じよ）は上に同じ。

参考までに、現代語訳を頼富本宏著『日本の仏典2　空海』（筑摩書房刊）の「即身成仏義」から、引用させて頂きます。

＊　＊　＊　＊

また、『金剛頂瑜伽修習毘盧遮那三摩地法』にいう。

「もろもろの存在は、本来生起しない（阿字）。その本性は、通常の言葉や説明によっては表現されない（バ字）。清らかで汚れがない（ラ字）。原因・条件の生ぜしめるところである（訶字）。あたかも虚空のようである（キャ字）。」　※仮名部分は原文では漢字です

この言葉も、先に『大日経』に説かれた趣旨と同じである。

ここでいう〈もろもろの存在〉とは、すなわち、もろもろの心の精神作用である。心の本体とその作用は、その数が量り知れない。それゆえに、〈もろもろ〉というのである。

「心」と「識」とは、名称が異なっているが、意味内容は通じあっている。したがって天親（世親）論師は、「すべての存在は、ただ心の表象のみにすぎない」ということを説いて、唯識の説を成立させている。

そのことは、先の『大日経』の説と同じである。

＊　＊　＊　＊

八月号、九月号、十月号では、『大日経』に表された六大について説明が加えられました。今月号では、それを『金剛頂経』でみてみようというわけです。

まず、両経での言葉の対応を、五月号でその「大意」を紹介しました、那須政隆著『即身成仏義の解説』（成田山仏教研究所刊）から引用させて頂きますと、次のようになります。

（六大の義）

文	我覚	識大	諸法	文
の	本不生	地大	本不生	の
出過語言道	水大	自性離言	経	
経	諸過得解脱	火大	清浄無垢	頂
日	遠離於因縁	風大	因業	剛
大	知空等虚空	空大	等虚空	金

九月号で紹介しました『大日経』での表示とは、順序と言葉が多少違っていますが、対応はつくと思います。

ここで、一つ注意しなければならないことがあります。それは、表の終わりから二行目の

遠離於因縁　―風大 ―因業

の対応です。

因みに、今月号の『金剛頂経』でのこの「因業」の現代語訳は、さきほど紹介しましたように「原因・条件の生ぜしめるところである（訶字）」とあります。

ところが、大日経の「遠離於因縁」を説明する九月号での原語は、「因業不可得」とありますし、その現代語訳は「さとりの世界が原因や条件などの働きを超越していることを象徴して」いると、あります。

こうみて来ますと、この対応表の「因業」は、「因業不可得」とならなければなりません。実は、真言密教のどの『念誦次第』でも、そうなっているのです。

こういう思いをもって、いろいろ解説書を読んでいましたら、さきほど紹介しました、那須政隆著『即身成仏義の解説』（成田山仏教研究所刊）に「『因業』は『因業不可得』の意味に解するのが、秘密の解釈とされている」という記述に出会いました。

別に「秘密の解釈」というほどのものではないと思います。弘法大師は、わざと「不可得」を落とされて、皆が理解できているかどうかをお試しになっておられるのだと思います。ですから、現代語訳も、不可得があるように訳さなければならないと思います。

この他には、もう分かりにくい語はありません。もし、確認のためでしたら、既に『大日経』で説明したのと同じですので、そこ（八、九月号）を参照して頂きたいと思います。

今回取り上げました、残りの部分で最も難しいのは、「諸法とは謂（いわ）く諸（もろもろ）の心法なり」で

はないかと思います。

この文章で、もろもろの修飾語を省きますと、「法は心なり」ということになります。

こうなりますと、「法とは何か」「心とは何か」を明らかにすることが、この文章を理解するためには、まず、必要になります。

法につきましては、私の理論では「他己の側の基本命題（目標）」として次のように用いています。

> 他己の側の基本命題（目標）
> 人間は法を目指して、
> より善く社会的であろうとする存在である。

そもそも法とは何なのかにつきましては、いつでしたか、既に中村元著の『仏教語大辞典』（東京書籍刊）から引用して紹介したように思います。もう一度再掲させて頂きます。

【法】ほう。〔Ⅰ〕普通は、「たもつもの」、特に「人間の行為をたもつもの」が原意とされる。インド一般に、次のような意義で使われている。①慣例。習慣。風習。行為の規範。②なすべきこと。つとめ。義務。ことわりのみち。③社会的秩序。社会制度。④善。善い行為。徳。⑤真理。真実。理法。普遍的意義のあることわり。⑥全世界の根底。⑦宗教的義務。⑧真理の認識の規範。⑨教え。教説。⑩本質。本性。属性。性質。特質。特性。構成要素。

（以下〔Ⅱ〕仏教以外の哲学の特殊な術語の紹介があり、続いて〔Ⅲ〕仏教における意味が述べられていますが、ここでは省略します。）

ここで紹介しました現代語訳では、「法」を「存在」と訳していますが、確かに〔Ⅲ〕の仏教の意味の⑪に、「事物。存在。存在しているもの。物。具体的個別的な存在。対象。もののありのままのすがた。」とあります。でも、ここでいう「法は心なり」というときは、法は、これだけではないように思います。ここでいう全ての意味を、多かれ少なかれ含んでいるように思えるのです。

私の理論では、こうしたものは、すべて（もろもろ）が他己に属します。そうしたものは、ですから、すべて人間精神（心）の他己の働きが作りだしたものなのです。

〔Ⅰ〕の普通の意味で述べられていますのは、①から⑩までのすべてが、人間の文化的営みによるものと言えますが、仏教で言われる「存在」は、この世の全ての存在が含まれますから、文化的に人間が作りだしたもの以外に、物理的、生物的存在も含まれることになります。

では、そうしたものまで、人間精神（心）が作りだしたと、何故、言えるのかが問題になります。

実は、私たちが、あるものが存在していると言うには、そのものを精神（心）が認識している必要があります。われわれが認識しえないものは、存在するとは言えないからです。そういう意味では、すべての存在は、心が作りだしたものであると言えるのです。

次に、心王、心数ですが、それらは、既に六月号で説明しましたので、ここでは省略します。

最後に、「心識（しんしき）、名異にして義通ぜり。故に天親（てんじん）等は、三界唯心を以て唯識の義を成立（じょうりゅう）す。」に進みます。

私の理論では、「心」は精神作用全体を表し、「識」は意識と無意識とで、これまた精神全体を指しています。ですから、これらは、その切り口が違うだけで、合い通じているのです。

次の三界とは、欲界・色界・無色界のことで、欲界とは、欲望に執らわれた生物が住む境域、色界とは、欲望は超越したが物質的条件（色）に執らわれた生物が住む境域、無色界とは、欲望も物質的条件も超越し、精神的条件のみを有する生物が住む境域で、生物はこれら三つの境域を輪廻するとされています。

三界唯心とは、こうした三界の現象は、すべて心から現れ出た影像（ようぞう）で、心によってのみ存在し、心を離れて別に外に存在するものではない、とする考え方です。この考え方は、天親（世親）〔ヴァスバンドゥといい、４－５紀頃のパキスタンのペシャワールの人〕によって完成させられ、唯識思想と呼ばれています。

この唯識派は瑜伽行派とも呼ばれ、ヨーガの実践を重視します。その体験の中から出てきた説とされています。

密教も瑜伽行（ヨーガ）を重視する点では、同じ特徴をもっています。でも、大きな違いがあるように思われます。それは、瑜伽行派では、他己の契機が疎かにされているという点です。

私の理論は、密教の即身成仏の体験を基にしています。それは、瑜伽行で三密加持され、仏と一体になることによって、あらゆる法（存在）が自分と一体であると、実感することができたことが、その出発点になっているのです。

私の理論の「自己」と「他己」は、この唯識派の思想と、もう一つの大きな仏教の流れである如来蔵思想との統合になっていると思われます。

まだ、詳しくは調べていませんが、時が至れば、文献でこのことを明確にしてみたいと思っています。

自作詩短歌等選

譲り合い助け合う

環境・開発サミットは
失敗に終わった

人間は
お互いに助け合えるから
人間なのに
国際的に
貧富の差は拡大して
社会的ひずみが増幅し
発展途上国では
エイズが蔓延している
なのに
援助が進まない

このままだと
地球温暖化も
森林破壊も
砂漠化も
水不足も
決して解消しない

自己責任
自由競争
市場原理至上主義
などといわず
譲り合い
助け合おうではないか

うかれる日本人

ノーベル賞
取った取ったと
うかれるな
大事な問題
山ほどあるに

ＥＵ二十五カ国体制

ＥＵが
二十五カ国
体制に
果してうまく
まとまれる？
エゴの渦巻く
世界にあって

身体への関心

いま
自分の体への関心が
高まっている

規範なき時代に
生き方を
模索しているのだ
という

でもそれは
自己陶酔を求める
一つの現れである
と知らなければ
ならない

疲れさせられる教師

いま教師は
半分の人が
辞めたいと思い
七割の人が
自分は教師に
不向きだと
思っている
という
そして
現実に
休職者や離職者が
増えているらしい
うべなるかな

ＤＶ防止法施行一年

ドメスティック・
バイオレンス（＝ＤＶ）
防止法施行一年で
申立件数が千件を超えた
という
毎月
件数が増えつづけて
いるらしい
夫婦互いの
「信」が失われ
関係が疎になるにつれて
ＤＶが増える
これも
他己萎縮の
必然的帰結

まさに修羅場

現在の世界は
まさに修羅場だ
民族対立
宗教対立
体制対立
国家対立
貧富対立
そこに
和する思想はない
このまま行けば
今世紀は
対立の世紀になろう
そして
世界中に
テロが蔓延し
やがて
核兵器が使われよう
そのとき人類は
滅亡の危機に瀕する

思いやりを示せば

人権教育では
思いやりや優しさを
教えている
でも
その手本を教師が示せば
とたんに
子どもたちになめられ
学級は荒れてしまう
いまの
教育現場の
実態

自作随筆選

愛国心で株価決定?!

十一月六日付け産経新聞の「正論」欄には、いま売れっ子の精神科医・和田秀樹氏が、「愛国心で株暴落防いだ米国投資家　日本の投資家よ！　株安の悪循環断て」と題して、投稿していました。

それによりますと「アメリカで株価が下がり、日本もそれに連れて下がっている。でも、下がり方のパターンが違い、アメリカでは、ある程度まで下がると、急に反発して値を戻す。ところが、それに較べ日本では、じりじりと下がり、そうしたアメリカのような急反発が見られない。それは、アメリカ人は愛国心から、ある程度下がると買い支えるが、日本人には愛国心が欠けていて、そうしないから、ずるずると下がるのだ」ということです。

全くの驚きです。

確かに、株価には、人気投票のようなところがあることは、あの有名な経済学者のケインズも言った通りですが、しかし、株価は様々な要因で決まっています。

下落のとき、その要因の極めて大きいのが愛国心であると、和田氏はおっしゃるわけですが、私は、こんな珍説があったのかと、あらためて驚きます。余談ですが、産経新聞の経済記者の方々もこの説を信じて、この記事を載せられたのか、不思議に思えます。それとも、「愛国心」にひかれてのことなのでしょうか。

ところで、いま、アメリカは、未曾有の経済的な繁栄を誇っていますが、それを支える哲学は、キリスト教が徐々に失われている現在、動物原理である「ダーウイニズム」のみになっている、と思えるのです。と言いますのは、アメリカがいま信奉する①自由競争、②市場主義、③グローバリズムの三原則の基礎には、強者の論理、つまり適者生存、自然淘汰の思想があるからなのです。アメリカは、いま、この思想を世界に広げようとしているわけですが、私の理論からいいますと、この思想は、自己追求の原理でしかありません。全く、他己原理を欠いているのです。

なるほど、アメリカは、いま世界から経済的に収奪することで、繁栄を保っています。でも、この繁栄は、いま見ましたように、動物のように他者を食い物にする思想に支えられているわけですから、長続きするわけがありません。もし、繁栄が続くとすれば、長続きするほど、

実は、限りなく滅亡に近づいているのです。

何故なのでしょうか。

こうした動物原理による繁栄が続きますと、アメリカ国内だけではなく、世界的にみても、貧富の差は拡大し、不平等感が、多くの人に強まってきます。

あのアメリカ貿易センタービルへのテロに象徴されます多くのテロは、この不平等感に由来しているのです。歴史的にみましても、マルクスの革命思想も、経済的不平等感に動機付けられていたのです。

一方には、贅沢三昧で多くの食べ物を残飯として捨てているのに、他方では、極貧の中で餓死や病死しなければならない多くの人がいる、というこの世界的な現実をアメリカや日本は放置しています。自己責任、自業自得とばかりに、見殺しにしているのです。こうした、強者たちの不平等な世界支配が続くかぎり、世界が安定して平和を保つことは、出来ないと知るべきなのです。

人間は、他者の苦しみや悲しみ、喜びや嬉しさを共有できるから人間なのです。

この強者による一方的な世界支配は、この人間性を無視しています。

こうした人間性の否定、それは、信仰・宗教・倫理・道徳・規範・伝統の否定でもあるのですが、そうしたものの否定は、人の行動の予測を極めて不確定にします。なぜなら、規範や伝統を無視して自己に閉じているからなのです。他者の事を配慮しなくなっているからなのです。テロがそうなら、強者の動物的な支配もそうです。そうなりますと、利害は常に対立し、常に変動することになるのです。

それは、まさにホッブスの言う「万人の万人に対する闘い」になってしまうということです。確かに、そうならないために、社会契約を結ぶという、それを回避する道が考えられていますが、それは、どこまでもエゴの原理の中にあるものであって、真に競争（闘争）原理を超えることはできないのです。

このように現代は、人々の行動の予測が極めて困難になっています。ですから、いつ、誰によって、どこで、どんなことが起こされようとも、あるいは起ころうとも、ある意味で、驚くにあたらないと言えるのです。

いま、株価はアメリカでは一応、下げ止まっていますが、いつ、もっと下がるか分かりません。それは、所得格差の拡大という経済自身の仕組みもあるでしょうが、それ以上に、テロにより、戦争により、天変地異により、人々の思惑により、その他、諸々の予測不可能な、主として負の要因によって変動を免れないからです。

釈尊のことば（一一七）

―法句経解説―

（三六四）真理を喜び、真理を楽しみ、真理をよく知り分けて、真理にしたがっている修行僧は、正しいことわりから堕落することがない。

この偈には、あまり難しい言葉はありませんが、ただ、「真理」とは何なのかが、まず、正しく理解できる必要があるように思えます。

中村元著の『広説佛教語大辞典』（東京書籍刊）では、真理は次のようになっています。

【真理】①真実の理。真実。真実の規範。理は事に対する。②真如。事（諸現象）に対して言う。③空の境地。空理に同じ。（以下略）。

この定義にありますように、真理は、事、つまり現象に対応した言葉で、その現象を成り立たしめている根源のことを言っているのです。

私の理論で言いますと、意識の世界は、現象の世界であり、無意識の世界が真理を成り立たしめる世界なのです。

ですから、真理は、修行によって、その無意識での自己と他己の統合が成り立つとき、私たちは、「真理をよく知り分け」ることができるのです。そして、そうする時「真理を喜ぶ」ことができ、「真理を楽しむ」ことができるようになるのです。こうして「真理にしたがっている修行僧は、正しいことわりから堕落することがなくなる」のです。

ここの「正しいことわり」とは、正しい道理と考えておけばよいと思います。つまり、人の道から外れないということです。

（三六五）（托鉢によって）自分の得たものを軽んじてはならない。他人の得たものを羨むな。他人を羨む修行僧は心の安定を得ることができない。

（三六六）たとい得たものは少なくても、修行僧が自分の得たものを軽んずることが無いならば、怠ることなく清く生きるその人を神々も称賛する。

この偈は、托鉢僧を対象にしていますが、これは、何も托鉢僧に限るものではありません。大多数の、一般に働くことによって所得を得て生活している人々に共通に言えることだと思います。

そうして努力した結果として、「自分の得たものを軽

んじてはならない」ということです。自分のが少ないと言って、他人の得たものを羨めば、心の安定が得られないということです。

また、たとえ得たものが少なくても、それを軽んじてはならない。軽んずることなく、「怠らないで清く生きる」ならば、そうした人を神々も称賛する、ということです。

人間は、こころ（情動－感情）の働きの中、つまり、その情動の中に、自分の欲望を追求する働きをもっています。それは、大きく分類すれば、食欲、性欲、優越欲の三つになります。

この最後の優越欲が、競争心や他人を羨（うらや）むこころを起こさせることになるのです。

人間は、自分の得た絶対量ではなく、他者と比較して自分の得た相対量に、満足を感じるのです。たとえ絶対量は少なくとも、他者がそれよりもずっと少なければ、よかったと満足を感じることになるのです。また逆に、絶対量は多いのに、他者がそれよりも多ければ、ねたんだり、うらやんだりすることになる、ということです。

いま、日本は経済的には世界でも有数の富裕な国になっています。世界に類のない贅沢を享楽しています。食べる物で言えば、多くの残飯をすてているのです。それなのに、日本はまた、世界に類を見ない「自殺王国」になっている、ということでもあるのです。

何故なのでしょうか。多くの論者は、日本の不景気をその原因の第一にあげていますが、果してそうなのでしょうか。

世界には、食べる物さえ満足に得られず、餓死や栄養失調による病死の危機に直面せざるを得ない国もたくさんあります。なのに自殺は、日本ほど多くはないのです。

私は、日本の自殺率の高さは日本人の自己肥大による優越欲への執着に原因を求めたいと思っているのです。

得るものの絶対量は、他の国に較べれば多いし、食料で言えば、餓死しなくてもよい位の量はどこからでも得られるのに、国の中では、他者と比較して少ない、と思う。そのために他者との競争に負けたと感じ、人生の敗残者のように思えて、生きていく気力を失うのだと思うのです。

この偈にありますように、得たものを軽んじないで、大切にしようではありませんか。質素倹約に努めようではありませんか。いま大学では怠けとごますりが蔓延していますが、「怠ることなく清く生きよう」ではありませんか。他者との比較ではなく、自分なりに精一杯、生きようではありませんか。

後記

一、今年は例年になく、早く寒さが訪れて来ました。もう何だか正月のような寒さです。

二、先日、さつま芋を全部、掘りました。コンテナ四杯ほど取れました。ことしは夏、日焼けしたせいか、あまり太っていませんでした。ストーブをまだ出していませんので、蒸し器で蒸して食べていますが、結構、おいしく頂いています。

三、私は、ＮＨＫ教育テレビで、毎週日曜日の朝五時から一時間放送される「こころの時代～宗教・人生～」をだいたいは見ているのですが、その中で、いま、月一回シリーズで、竹村牧男氏が「ブッダの宇宙を語る－華厳の思想－」と題して放送しています。

四、先日、そのテキスト（後半用）を買ってきて、読んでいましたら、華厳宗の根本経典に法蔵という僧の書いた『華厳五教章』があり、その中に「唯心廻転善成門」という言葉が出ていたのです。とても驚きました。

五、教章は、私の父の名ですし、善成は私の法名だったからです。

六、そして、その善成の説明を読んで、縁の深さに再び驚きました。そこには、次のように書いてありました。

「縁起の世界は、唯一心が転じて善く（能く）成じたものであることを示し、縁起の世界の本を明かしたものです。その唯心、唯一心は、自性清浄心のことであり、これが転じて無限の縁起の世界が展開するのだというのです。（途中略）この転ずるということの中には、理事無礙から事事無礙へと理が消えることも含まれていることでしょう。」（理事無礙と事事無礙は説明略）。

七、善成という名も、私が自分で考えて付けた名ですが、それも、私を得度させた下さった加藤則成師の成を頂いたことになっていたことを後で知りました。

八、すべて仏のおはからいであったのかと、その深い仏縁を思わずにはおれません。

月刊　こころのとも　第十三巻　十一月号　（通巻　一五五号）

平成十四年十一月八日
〒７７２－８５０２
徳島県鳴門市鳴門町高島
鳴門教育大学　障害児教育講座気付
（ひびきのさと　沙門）中塚　善成（ぜんじょう）

本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名　ひびきのさと　口座番号０１６１０－８－３８６６０